キャリア発達能力の育成を目指す取り組みが学習成果に及ぼす影響

―児童への継続した調査にもとづく小学校体育科の事例より―

山口　孝治・櫛橋　卓仁・木村　達也
（附属京都小学校）（附属京都中学校）（附属京都中学校）

The effects of career development ability on teaching products
－A continual survey in physical education classes－

Kohji YAMAGUCHI, Takuji KUSHIHASHI, Tatsuya KIMURA

2006 年 11 月 30 日受理

抄録：本研究では，キャリア発達能力の育成を目指した体育科の学習が学習成果に及ぼす影響について検討することを目的とした。小学校５年生を対象に１年間の継続した調査結果をもとに分析を行った。学習成果は態度測定法による態度尺度を，キャリア発達能力に関する尺度として，独自に作成した７つの項目からなる「キャリア能力評価票」を用いた。その結果，概ね次のようなことが明らかになった。１）態度測定より男女とも十分な学習成果（愛好的態度）を得ることができた。２）キャリア能力得点においては男女間で差はみられなかった。しかし，３つの項目の中では「意志決定能力得点」が最も高い値を示した。３）「態度得点」には「意志決定能力得点」が大きな影響を及ぼしていることが明らかになった。今後は，調査種目や発達段階（学年）を考慮し，継続して取り組むことが課題である。

キーワード：キャリア教育，キャリア発達能力，愛好的態度，小学校，体育授業

Ⅰ．はじめに

キャリア教育という言葉は広く認知されるようになり，全国で，具現化に向けた取り組みを進める指定校が指定されるようになってきた。本校でも５年前よりキャリア教育の理念を具現化する取り組みを進めてきている。言うまでもなくキャリア教育は学校教育全体を通して進められるべきものであり，特別活動や体験学習だけですまされるものではない。けれども，現状としてはまだまだ，上述した活動に焦点を当てている学校が多いように思われる。言い換えると，学校教育全体を通して行うという視点からすれば，今後は，学校教育の中で最も時間数が多い教科学習の位置づけが大切になってくるものと思われる。

本校でも，昨年度からキャリア教育を具現化するための教科学習の有り方に焦点を当てて研究を進めてきている。こうした取り組みは，毎年，全国発表を行うなど全国の小中学校に先導的な役割を果たしてきているものと考える。また，その取り組みは学校現場だけでなく，学会等にも報告され先進的な取り組みを進めている学校として認知されているといえよう[1)－3)]。

これまでは，本校の紀要や報告書に記載する取り組みは，一単元による学習成果とキャリア発達能力との関連から報告されるものが大多数である。これは，研究授業をベースに報告書を作成していく本校のシステムによるところも大きいが，その一方で長期に渡って客観的な調査を継続してこなかった点も指摘できる。キャリア発達課題を達成するための力となるキャリア発達能力は，短期間で培われるものではないことを鑑みたとき，学習成果とキャリア発達能力の関連を追及するにはある程度，長期間にわたる継続した調査等が必要になってくるものと思われる。また，その際には，信頼性のある尺度を用いるべきものと考える。

そこで，本研究では，小学校５年生を対象に体育科の実践を通して，１年間という長いスパンの中で，「キャリア発達能力」の育成を図る取り組みが，子どもたちへの学習成果に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。具体的には，体育授業に対する愛好的態度の高まりを学習成果とし，年度の序盤，中盤，終盤と子どもたちへの継続した意識調査を行い，その変容過程と結果をもとに検証を試みることにした。

Ⅱ．研究方法

1．対象

京都教育大学附属京都小学校５年生　110 名

2．授業実施期間

平成 17 年４月～平成 18 月３月

3．授業の概要

（1）年間計画と授業づくりの視点

本校では小中一貫のカリキュラムを作成し，小学校と中学校の教官が互いに人事交流を行いながら実践を進めている。５年生の体育の授業も小学校の教官と中学校の教官により授業を行った。昨年度（実践を行った年度）はカリキュラムの作成も研究の視点に捉えていたため，各単元の授業を構想する際には，「キャリア発達能力」の４能力領域の中で，「意思決定能力」「人間関係形成能力」「情報活用能力」を育むことにつながる活動を積極的に取り入れるようにした。例えば次のような活動である。

・めあてを選択したり自分で決める場を設けたりするとともに，めあての解決に向けての練習活動の工夫等を行えるようにし，粘り強く課題解決に向けて取り組むようにする。
・個人スポーツにおいては「練習の場」等で，集団スポーツにおいてはグループ内でそれぞれ，積極的に友だちに関わる場面を設定する。
・取り組む技の技能的ポイントを図示した資料や視聴覚機器を用いて，課題解決に向けての情報を取捨選択しながら活動に取り組むようにする。

表１は，上記の視点を実際の単元でさらに具体化したものの一例である。なお，「将来設計能力」については視点を当てないことにした。５年生という発達段階を考慮したとき，「設計能力」の育成につながる学習内容を考えることが困難であると判断したためである。

（2）指導体制

小学校教諭１名，中学校教諭２名の計３名で指導を行った。５月から６月に行った「コース別学習」の授業については，さらに中学校教諭が１名加わり，「ハンドボールコース」を小学校教諭と中学校教諭の２名によるＴＴ体制で，「やり投げコース」と「投げ方チェックコース」については中学校教諭が１名ずつで担当した。他の単元については，基本的には子どもたちは学級を単位とし，教師は種目別担当制により各クラス１名の教師で進めることにした。

4．児童への意識調査

（1）学習成果（愛好的態度）の測定

体育科の目標は，子どもたちに体育に対する愛好的態度を形成することにある。したがって，本研究においては子どもたち一人ひとりの体育の授業に対する愛好的態度の形成度を学習成果と捉えることにした。そこで，体育授業に対する愛好的態度を測定するために小林[4]が作成した態度尺度を用いることにした。これは 30 項目からなる尺度で，「よろこび」「評価」「価値」の因子より構造化された診断指標として実績のある尺度である[5][6]。調査は，対象児童全員に対して４月の年度当初と年度末の３月に実施した。

（2）キャリア能力得点の測定

高橋[7][8]が作成した体育授業に対する「形成的授業評価票」を参考にし，表２のような７項目からなる尺度を独自に作成した。「形成的授業評価票」は，１授業の授業評価用の尺度として作成されたものであり，今回の

表1　各単元におけるキャリア能力育成につながる活動例一覧

	コース別学習	ハードル走	マット運動	バスケットボール	バドミントン
意思決定能力	・自分が興味を持ったコースを選ぶ。	・運動の構造的特性を理解し，自分に合っためあてを決める。	・提示された技の構造を理解し，自分に応じためあてを選ぶ。	・自チームの様子を考えてチームのめあてを決めたり，自分のめあてを決めたりする。	・提示されためあてを理解し，解決するための方法を考えたりする。
	・自分が選んだコースの中で，各課題を解決すべく粘り強く取り組む。	・自分の課題に応じた練習の場で繰り返し活動する。	・自分が選んだ技を獲得するために，練習の場を活用したりしながら粘り強く取り組む。	・チームの時間で考えた練習方法に積極的に取り組む	・ペアの友だちと協力しながら練習や試合に取り組む。
情報活用能力	・自分の投げ方をVTRでチェックし，課題を見つけたり，進歩の様子を確認する。	・VTRや友だちのアドバイスを参考にしたり，分解図を活用したりしながら課題に取り組む。	・技別ポイントカードを見て技のポイントを確認したり，自分の課題に応じてアドバイスカードを活用することができる。	・自チームのシュート数やシュート成功率を生かして，練習を工夫したり作戦を考える。	・サービスやスマッシュの分解図を活用して課題を見つけたり，進歩の具合を確認したりする。
	・ターボジャブ（プラスチック製のやり）を投げる際のポイントをＤＶＤ等で確認する。	・自分の様子を友だちにVTRで撮影してもらい，自分の様子を知る。	・自分の様子を友だちにVTRで撮影してもらい，自分の様子を知る。	・強いチームの様子を観察し，自分たちのチームにないところを見つけ，自分たちのチームに生かす。	・DVDで映し出されたプレーヤーの様子をみて技術のイメージをもつ。
人間関係形成能力	・活動が円滑に進むように役割分担を決めて，役割を果たす。	・友だちが試技する前・後でハードルを移動し，気持ちよく試技できるように協力する。	・マットがズレた時などは，元の位置になおしたり，友だちが活動しやすいように協力しておく。	・グループの友だちの意見を取り入れながら，チームが勝つための戦術等を話し合う。	・ペアの友だちの思いを知り，活躍できるように工夫する。
	・自分が選んだコースに集まった友だち同士で準備や後かたづけを協力して学習を進める。	・ハードルの準備や後かたづけがをグループのみんなと協力してできる。	・友だちの活動の様子をチェックしたりし，アドバイスを送る。	・勝敗にこだわらず，試合前後のあいさつをしっかり行おうとする。	・勝敗にこだわらず，試合前後のあいさつをしっかり行おうとする。

表２　キャリア能力評価票

＜意志決定能力＞
・精一杯全力をつくして運動できましたか。
・自分から進んで学習できましたか。
・自分のめあてに向かって何回も練習できましたか。
＜人間関係形成能力＞
・友だちと協力して仲良く学習できましたか。
・友だちとお互いに教えたり助けたりしましたか。
＜情報活用能力＞
・資料や友達の様子等を見ましたか。
・資料や友達の様子，先生のアドバイス等が役に立ちましたか。

尺度も１授業用の評価用尺度として使用するために作成することにした。尺度は７項目からなり，「人間関係形成能力」に関するもの３項目，「情報活用能力」に関するもの２項目，「意志決定能力」に関するもの２項目である（以後「キャリア能力評価票」と呼ぶ)。「将来設計能力」に関する項目は本単元の活動を鑑みたとき，適切な項目を作成することが難しいと判断し，見合わせることとした。これらの尺度を年度の序盤に当たる「コース別学習」，年度の中盤に当たる「マット運動」，年度の終盤に当たる「バドミントン」の単元において，毎時の終了時に実施した。各項目は３段階評定法（はい－どちらでもない－いいえ）で記し，「はい」を３点，「いいえ」を１点，「どちらでもない」を２点に換算し分析を行った。ここで，「人間関係形成能力」に関する３項目の得点の総平均を出し，「人間関係形成能力得点」とした。残り「情報活用能力」と「意思決定能力」の２項目についても同様な手順で行い，それぞれ「情報活用能力得点」「意志決定能力得点」とした。

5. データの分析及び統計処理

上記の調査結果については統計処理を行った。態度尺度，キャリア能力得点ともに全てのデータ処理は，SPSS Ver.12 を用いて行った。

Ⅲ．結果

1. 態度測定（学習成果）の結果

表３は態度測定法による診断結果を示したものである。年度当初の調査では，男子が「高いレベル」，女子が「アンバランス」であり，男女間で大きな差が認められた。しかし，年度末の調査では，男子は「高いレベル」を維持すると共に，女子は「かなり高いレベル」と大きな変化がみられた。年度当初と年度末の変化の度合いの診断結果もどちらも「成功」を示していた。これより，全体としては，男女とも年度末には愛好的態度の向上は図られたと思われる。特に女子において体育の授業に対する愛好的態度の変容が大きかったことが明らかになった。この結果は，１年間の体育の学習の成果が表れたものといえよう。

表3　態度測定診断結果

	年度当初	年度末	年度評価
男　子	高いレベル	高いレベル	成　功
女　子	アンバランス	かなり高いレベル	成　功

2. キャリア能力得点の結果

表4　キャリア能力得点　（　）内の数字は標準偏差

	意志決定能力得点	人間関係能力得点	情報探索能力得点
男　子	2.84 (0.20)	2.70 (0.28)	2.61 (0.33)
女　子	2.81 (0.26)	2.73 (0.25)	2.67 (0.27)
学　年	2.82 (0.23)	2.71 (0.27)	2.64 (0.30)

「キャリア能力評価票」を用いて「意思決定能力得点」「人間関係形成能力得点」「情報活用能力得点」（以後，これら３つを合わせて「キャリア能力得点」と呼ぶことにする）を算出した。どの項目も 2.60 以上の得点が出ている。中でも「意思決定能力得点」は，2.80 を越えていた。尺度の構成上 3.00 より高い点数は出ないことを考えると，どの項目の得点も高い数字が表れたといえるだろう。また，男女間で t 検定を行った結果，どの能力領域得点も有意な差はみられなかった。

表５　単元別各能力得点一覧　（　）内は標準偏差

単元名	能力得点名	男子	女子	学年
コース別学習	意志決定能力得点	2.74 (0.39)	2.74 (0.35)	2.74 (0.36)
	人間関係形成能力得点	2.57 (0.40)	2.63 (0.40)	2.60 (0.40)
	情報活用能力得点	2.54 (0.44)	2.61 (0.37)	2.58 (0.40)
マット運動	意志決定能力得点	2.88 (0.21)	2.82 (0.30)	2.85 (0.26)
	人間関係形成能力得点	2.74 (0.37)	2.78 (0.27)	2.76 (0.32)
	情報活用能力得点	2.71 (0.36)	2.79 (0.25)	2.75 (0.31)
バドミントン	意志決定能力得点	2.87 (0.21)	2.83 (0.30)	2.85 (0.26)
	人間関係形成能力得点	2.75 (0.26)	2.75 (0.33)	2.75 (0.30)
	情報活用能力得点	2.54 (0.43)	2.59 (0.40)	2.57 (0.41)

さらに表５は，調査を行った３つの単元毎に「キャリア能力得点」の結果を示したものである。表４と同様能力得点毎に男女間で t 検定を行った結果，どの領域得点においても有意差はみられなかった。先に述べた態度得点の結果とは違い，「キャリア能力得点」においては男女で意識差はなく学習に臨めていたものと考えられる。

ここで，３つの項目を独立変数，得点を従属変数として分散分析を行った。その結果，各能力得点間で有意差が見られた（F (2, 324) =12.77, p<.001)。そこで，Tukey の HSD 法（５％水準）による多重比較を行ったところ，「意思決定能力」＞「人間関係形成能力」＝「情報活用能力」という結果が得られた（図１）。

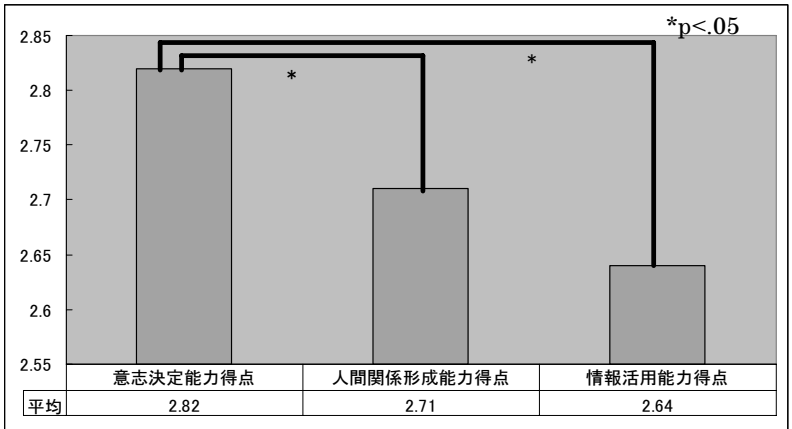

図1　キャリア能力得点一覧

また，表６は各能力得点間の相互相関をピアソンの積率相関係数により示したものである。各能力得点は互いに有意な正の相関が認められた。中でも「意思決定能力得点」と「人間関係形成能力得点」との間で，最も強い相関（0.68）が認められた。

表6　各キャリア能力得点の関連

	意志決定能力得点	人間関係形成能力得点	情報活用能力得点
意志決定能力得点	―	.68**	.43**
人間関係形成能力得点		―	.59**
情報活用能力得点			―

** p<.001

3. 学習成果とキャリア能力得点との関係

表７は，学年度末に行った態度測定調査をもとに，子どもたち一人ひとりにつき各項目の合計点を算出し，それをもとに平均点を基準として上位群（平均得点以上）と下位群（平均得点以下）にわけ，キャリア能力得点が群間において差異がみられるかどうか，ｔ検定を行った結果である。その結果,「意思決定能力得点」と「情報活用能力得点」においては有意差がみられた。しかし「人間関係形成能力得点」においては有意な差はみられなかった。

表7　学習成果からみた各キャリア能力得点一覧　（　）内は標準偏差

	上位群	下位群	t値
意志決定能力得点	2.88 （0.13）	2.76 （0.29）	2.59*
人間関係形成能力得点	2.74 （0.23）	2.67 （0.30）	1.41
情報活用能力得点	2.71 （0.26）	2.56 （0.32）	2.64*

＊ p<.05

次に，表８は年度末の態度得点を基準変数，キャリア能力得点を説明変数として重回帰分析を行った結果である。その結果，有意な関連性を示したのは「意思決定能力得点」（$\beta = 0.32$）であった。後の２つの能力得点については有意な関連性は認められなかった。

Ⅳ．考察

今回の実践を通して明らかになったことから考察を試みたい。まず，態度得点による年度末の診断結果は，男女ともに値を示した（表３）。特に，女子においては年度の当初の様子を考慮すると大きく向上している。これまで，多くの学者により体育科の目標論が論じられてきている。近年においては目標を達成するための構造（学習領域や具体的目標の構造）の捉え方は違いがあっても第一層として「情意目標」（好きになる）を挙げている研究者が多い[9)]。すなわち体育に対する愛好的態度である。態度得点にもとづく態度測定法による診断結果はこうした愛好的態度を評価する道具として多くの現場で活用されてきている。これより，本研究の対象となった１年間の体育授業の取り組みは子どもたちにとっても大きな成果をもたらしたと考える。つまり，キャリア発達能力の育成をねらい取り組んだ活動の積み重ねが有効であったといえよう。

キャリア能力得点については，各領域の得点における男女間で差はみられなかった（表４，表５）。この結果については，調査対象にした種目による影響も考えられる。例えば，今回調査した種目には「水泳」や「表現運動」の領域は含まれていない（「コース別学習」の中にはハンドボールややり投げが含まれており，ボール運動や陸上の領域が含まれる）。特に「表現運動」では男女間での意識差が大きいことが報告されている[10)]。この点においては今後も継続して調査していくことが必要である。このことは表７の結果からも推察できる。表７では，態度得点をもとに上位群と下位群にわけ，キャリア能力得点を分析したものであったが，「人間関係形成能力得点」のみ，両群で有意差はみられなかった。バスケットボールやサッカーなど球技系の集団種目が調査対象にな

っていないことが影響しているかもしれない。

キャリア能力得点が高いことは，その能力そのものが高いというものではない。能力そのものを測ることは非常に困難である。したがって，今回行った調査より高い得点を得た子どもは，低い子どもよりも自分自身でその能力が高まる可能性を感じながら学習を行うことができたことを示すものである。中でも「意志決定能力得点」が他の２つの能力得点よりも有意に高かった（図１）ことは，性別に関係なく，１年間を通して子どもたちの心の中に「精一杯全力を尽くせた」とか「自分のめあてに向かってしっかり取り組めた」という思いを強く持って取り組めたことが多かったといえよう。加えて，重回帰分析の結果から，「意志決定能力」が態度得点に影響を及ぼすことが認められたことは，上記のような意識を持って取り組むことができたと自分自身で感じて活動できれば，愛好的態度を高めることにつながるといえよう（表８）。

表８　態度得点とキャリア能力得点との分析結果
（重回帰分析による）

		態度得点
	R	0.35
	R^2	0.12
意思決定能力得点	β	0.32*
人間関係形成能力得点	β	−0.04
情報活用能力得点	β	0.12

*p<.05

この結果は，５年生という時期においてのことなのかどうか，今後も調査をしていく必要がある。確かに表６より，「人間関係形成能力」や「情報活用能力」は「意志決定能力」を含めて互いに関連しあっていることは明らかになったが，その一方で，「人間関係形成能力」や「情報活用能力」は「意志決定能力」ほど，他の分析においても目立った結果が出ていない。調査対象の種目，発達段階，学習環境等を考慮してさらに研究を進めていくことを今後の課題としたい。

Ⅴ．まとめ

キャリア教育における教科学習のあり方が今後は重要視されるようになってくると思われる。そこで本研究では，キャリア発達能力に着目し，それらの育成を目指した体育科の学習の取り組みが学習成果に及ぼす影響について検討することを目的とした。これまでも単元レベルでの実践はみられるが，長期間にわたっての取り組みは見られなかったので，本研究では小学校５年生を対象に１年間の継続した調査結果をもとに分析を行った。学習成果は愛好的態度の高まりで評価することにし，態度測定法による態度尺度を用いた。また，キャリア発達能力に関する尺度として，独自に作成した７つの項目からなる「キャリア能力評価票」を用いた。

２つの尺度の調査を分析した結果，概ね次のようなことが明らかになった。

１）態度測定による診断結果より，男女とも十分な学習成果（愛好的態度）を得ることができた。２）キャリア能力得点においては，各領域に男女間で差はみられなかった。しかし，３つの項目の中では「意志決定能力得点」が最も高い値を示した。３）「態度得点」には「意志決定能力得点」が大きな影響を及ぼしていることが明らかになった。

上記の結果より，５年生の子どもたちは，性別に関係なく「精一杯全力を尽くせた」とか「自分のめあてに向かってしっかり取り組めた」という思いを強く持てるような学習の積み重ねによって，体育授業に対する愛好的態度を高めていくことにつながるものと推察される。今後は，調査種目や発達段階（学年）を考慮し，継続して取り組むことが課題である。

文献

（１）山口孝治，2005，キャリア発達能力に焦点をあてた教科学習における学習成果の検討－小学校体育科の実践例をもとに児童の意識と学習成果に着目して－，日本キャリア教育学会第 27 回研究大会論文集，99-100

（２）中西　仁，2005，教科の授業によるキャリア教育－選択能力に焦点をあてた社会科授業実践－，日本キャリア教育学会第 27 回研究大会論文集，51-52

（３）高綱睦美，2005，小学校におけるキャリア教育の効果に関する研究－学習理由と自己有能感の変化を中心に－，日本キャリア教育学会第 27 回研究大会論文集，97-98

（４）小林　篤，1986，体育の授業研究，大修館書店，東京，pp.170-222

（５）梅野圭史・藤田定彦・辻野昭，1986，体育科の授業分析－教授活動の相違が児童の態度に及ぼす影響－，スポーツ教育学研究 6，1-13

（６）梅野圭史・中島誠・後藤幸弘・辻野昭，1997，小学校体育科における学習成果（態度得点）に及ぼす教師行動の影響，スポーツ教育学研究 17，15-27

（７）高橋健夫・長谷川悦示・刈谷三郎，1994，体育授業の「形成的評価法」作成の試み，体育学研究 39，29-47

（８）長谷川悦示・高橋健夫・浦井孝夫・松本富子，1995，小学校体育授業の形成的評価票及び診断基準作成の試み，スポーツ教育学研究 14，91-101

（９）竹田清彦・高橋健夫・岡出美則（編），1997，体育科教育学の探究－体育授業づくりの基礎理論－，大修館書店，pp.17-40

（10）山口孝治・和田　尚，2005，学習者の意識の変容からみたボールルームダンス学習の有効性に関する研究－小学生と中学生による継続した調査からの検討－，京都体育学研究 21，25-35

（11）梅野圭史・辻野　昭，1980，体育科の授業に対する態度尺度作成の試み－小学校低学年児童について－，体育学研究 25，139-148

（12）奥村基治・梅野圭史・辻野　昭，1988，体育科の授業に対する態度尺度作成の試み－小学校中学年児童を対象にして－，体育学研究 33，309-319

（13）中学体育実技　京都府版，2006，学習研究社，東京